

| | |
|-------------|---|
| Title | 朝鮮地名の考説(五) |
| Author(s) | 中村, 新太郎 |
| Citation | 地球 (1925), 4(6): 477-487 |
| Issue Date | 1925-12-01 |
| URL | http://hdl.handle.net/2433/183026 |
| Right | |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| Textversion | publisher |

朝鮮地名の考説(五)

中村 新太郎

四 地形に關する地名ノツミキ

遷 崖 別 遷は二つの峽谷の合した處である、或は川沿ひの崖路である、水出兩峽中、其兩崖迫水之路、東俗名之曰遷とあり、瓮遷江原、通川、兔遷慶北、開慶、花遷平北、熙川、清江の上流、銅遷平北、清原、山羊遷平北、江界等がある。滿洲の岔に相當する。崖道には別サヤンベリ(ビヨル又はベリ)別吾サヤング(ビヨルウ)或は崖サヤンベリ(ベリ)をつける。咸南長津に山羊別あり、山陽は山野に獵することサヤンベリで山陽軍は獵夫のことである、山羊別は獵夫の歩く崖路と云ふ意である。

普通には崖路のことを飛脫(ピタル)と云ふ。ピタルに圪橋、仄岸、崖、遲達、壁橋の漢字を宛てることがある。沙汰サツテ(サツテ)は山崩れの急斜地で小地名として沙汰谷サツテコルがある。十多里サタリと云ふのも沙汰谷から轉じたものであらう。

仇非（クビ）は川の屈曲した部分である。仇味、鳩飛、貴碑、口非などの字で現はすこともある。蓋し仇非は前に述べた串が仇智（クッチ）となり再び轉じたものであらう。石仇非、回龍仇非などがあり殊に鳴緑江の本流及支流が倣入屈曲をした處に多い。一般に朝鮮では東西行する谷に屈曲が劇しく南北走する溪谷は紆餘することが少ない。これは地球の自轉による水流の遅緩に因るのだと考へられる。もし鳴緑江の一部の五萬分一地形圖例へば新島場圖幅^{楚山}三號を見る時にはデーズキスの地形學にある倣入屈曲の模型にかゝれた地形を見出す。屈曲した流路が直流する様に流路を換へるともとの流路は半環形の平地となる。この流路變轉の地形は朝鮮到る處の山地に認めることが出来るが、其の著しい一二を舉げて見ると平北厚昌の銅店のすぐ南には圓形の舊河床が平地として残つて此處に釜内^{カマアキ}はいふ三四軒の集落があつて、まるで釜の内にある様な地形を表はしてる。太白山の山中に穿川と稱する奥陶紀石灰岩の天然橋があつて洛東江の上流は其の橋下を流下する、此處は屈曲した舊河床の流路が石灰洞の出來た爲めに切り去られ（cut out）たものである。前に舉げた回龍仇非と云ふのは山で圍まれた倣入屈曲を意味する。川が迂回した處に水回場^{ミドリチャング}忠北^{忠北}がある。仇非又は仇味と云ふのは獨り川の屈曲した處ばかりでなく海岸の出入した處をも指すのであらう。九味浦^{長淵}、加馬九味^{全南莞島にあり、此處には愛媛縣からの移住漁村がある}等がある。内地では丹後に久美濱があり、隱岐島後の北西端に久見がある。蓋し屈曲多き海岸線を持つた處を示したものであらう。

隅は曲なり、曲がり角である。訓はモルで各地に石隅トルモルと云ふのが多い、道が山端の露岩に當つて曲がつて居りそこに小平地がある處である。此の外堂隅とか長隅カンモルとかがある。隅のつく處にはよく小市場があつたり宿屋があつたりする。淋しい溪谷に沿うて旅した場合にはよくこんな處で晝食を攝る。

兩江、合水 二つの川の出會つた處である。兩江は平北に多く合水フナヰは咸鏡道に多い。此の外に兩水里京畿楊平の兩水里は兩頭水兩合里(ヤンテムル)と俗稱するがあり、面名としては三支江面黄海があり郡名としては三水がある。

於口、洞口 是小流が大河に合する地點である。そして其の小溪名洞名を冠して何谷オグ於口、何洞口と呼ぶ。かゝる落合には小集落が出来ることが普通である。前條の兩江、合水と共に内地の落合、川合、川俣などに該る地名である。

三巨里サムコリ と云ふ地名が中部以南に多い。其の三四を擧げて見ると京畿の漣川、忠南の牙山、全北の茂朱、全南の順天及び羅州、慶南の統營、江原の新溪などにある。これも二つの谷が合一し路が三叉した處にある集落を意味するのである。三街里、三岐里といふのも同じことを表はしたに過ぎない。巨里と云ふのは後條に述べる市場の巨里に關係を持つた語でコリがつく地名は三巨里の外に次の如きものがある。巨里慶南蔚山、富巨里全北金堤、赤巨里京畿漣川、馬巨里同上、増巨里京畿水原、仙古里忠北堤川 などが其

れである。

浦 音ボ訓ケである。一般には浦口、船著場、港を意味するが港と云つても必ずしも海港に限らない河港でも浦と云ふ。特に海浦と云へば朝鮮の西海岸に多い海岸の干潟地のことを指すのである。著しい都邑としては木浦、鎮南浦、兼二浦、金浦がある。釜山^{フサン}にしても昔は日本人は釜山浦と云つた。麻浦^{サムグ}は京城の南西に接した漢江の荷船が著く處で内地人はマホと呼んで居る、然し古い本などには三浦とも書いてあるし、現在でも京城の西大門から電車でそこへゆく朝鮮人は皆サムゲと云ふ。

潟湖に浦と附けるのも内地で北浦や霞ヶ浦とするのに同じい、朝鮮で最大の湖沼は咸南咸興郡と定平郡とに跨る廣浦と云ふ潟湖で周三里十七町面積〇方里八六二ある。

處が山間に浦をつけた地名を見出すことが屢である、そこには船を通ずる様な川がないが小流はある。平北熙川や慶北奉化の山地に石浦里があり忠北忠州に遠浦里がある、これ等の浦は流水の傍と云ふ意義でもあらう。

灘 音ナン、訓オルで、支那に於ける如く海の沖合でなくて、河中の浅い處の意義で峡谷を成した處にある。慶北開慶の犬灘^{ケイオル}は洛東江の一支が峡谷を成した處で二疊紀植物化石の産地である。忠南燕岐には壺灘里があり、忠北永同には虎灘里があり、其の他灘のついた地名が少くない。

溪 潭 湍 澤 をつけた地名がかなりある。溪は谷を美しく書き直したものであるらしい、郡

としては新溪高麗の新恩と狭く溪を併せたものがあり、市の開かれる集落としては玉溪江原江陵、安溪慶北義城、長溪金北長水等がある

洞里名として溪をつけたものは甚だ多く、試みに忠北永同郡の洞里名百三十一を通観すると内に雪溪里、林溪里、覺溪里、晚溪里、紫溪里、小溪里、金溪里、溪龍里の八つを見る、それ位一般に溪のついた地名が多い、蓋し朝鮮には平地が狭くて高くはないが一體に山地であるからである。

潭湍澤は次項の淵に似て居るが山地の川沿ひの處につけられて居る。蓮潭里、龍潭、葛潭、長湍平澤等がある。

淵 池 湖 塘 堤 沼 スツプ 淵には河の深い部分の意義があると共に池の意味もあつて池、沼

などと同じく訓はモである。龍淵里と云ふ處が甚だ多い、郡名としては長淵がある。

池、沼、塘共に訓はモである。池である。白頭山頂の天池は周圍二里三十二町の火口湖である。

湖沼の名として沼をつけたものは少ないが龍沼洞と云ふのは方々に見受ける。塘は地名としてかなり多い龍塘里、高塘里、池塘里等がある。池のモは古くは漸と書いてさうである。

湖沼に湖や堤をつけたものが少くない。朝鮮第二の湖水たる腰橋湖は組合區域の廣さ三千五百九十町歩に及ぶ全北臨盆水利組合の貯水池になつて居る。又全北金堤の菱堤は周二十三町の池である。各地に水利組合が組織されるにつれて人工の掘鑿池や谷を堰き止めた堰塞湖が出來つゝある。堤は

高句麗時代にはト(吐又は土)と云つたらしい。

國^{ヌッ}

時に淵皮と書く。段丘の下のジク／＼した沮洳地である。咸南の北青には水國湖及び絃琴國湖と呼ぶ湖水があり、平北の渭原や碧潼や咸南の三水には國坪里があり、平北楚山には淵皮江と稱する川があり、咸北端川には國峙山と呼ぶ山がある。

津 音シン訓ナル又はナリである。港又は渡場である。河についても海についても孰れでもよい

清津、城津等は海港であり、恩津は錦江畔の郡名である。長津^{咸南}は高原上の小さき川の岸にある。山の中のものとは無論渡頭を意味する。渡船を津船^{ナルベ}と云ふ。内地で津のついた處は海港か又は大津の様に海に比敵すべき大きな湖水に沿うた處である。大阪市に併合された東成郡及び西成郡の成又は生^{ナル}は津と同じ。朝鮮で又津は大河の或る一區間を表はすこともある。

渡 渡頭であることは津の一つの義に同じい、禮成江には碧瀾渡があり、安城川の安城渡は日清役に名高かつた。

橋 渡しに關聯して橋がある。橋のついた地名はかなり多い、大橋^{忠南}、辰橋^{慶南}、雙橋^{全南}等擧げ

るに違まない程多い。細橋里は各地にある。平南中和郡石橋には石灰岩の小天然橋がある。尤も石橋と云へば一般には小溪を渡る爲めに置かれた石塊が散布されたものである。橋頭里と云ふのは橋畔の集落である。

梁 水橋也又水堰也とあり、また加羅語謂門爲梁ともある。郡梁里京畿、利川、梁坪里同上、梁項里忠南、保寧等のは橋又は門の義として説明し得られる。然るに今西博士は慶北慶山の押梁の梁は昔都邑を意味した喙くちばし又は渌ろくから梁りやうになつたものでトル、トク、トなどと訓むたのが後には今のリヤンになつたのだと説かれて居る。此等の外古梁里忠南、牙山、梁文里京畿、抱川等がある。

海 郡名としては金海、南海、及海南が南方海に近い方にある。海州、鎮海は主要都市である。朝鮮の南方の海は地理上確定した名がないが朝鮮人から云はせると南海である。里名としては海のない處に東海里、海谷里などがあるが借字に過ぎないと思ふ。

泉 井 朝鮮は一般に飲用水に乏しく朝鮮人は天然の泉の水を好む、泉洞と云ふ小地名は何處にもある、水の少ない地方で偶、泉の湧く谷であるとして名づけたものである。金泉は慶北の殷盛な町であり、醴泉は慶北の靜な郡邑である。冷泉洞、湧泉里、槐泉洞などはかなり多い地名である。椒泉里慶南、蔚山は炭酸泉の出るからつけたものである。

井は井戸の意味とあるが主に泉の意である。冷井洞はざらにある。忠北清州の椒井里にはよき炭酸泉が湧き今ではサイダーや炭酸水を賣出してゐる。黃海安岳にも椒井と云ふ處がある。大井里なども屢々ある。溫井と云ふと溫泉のことである。朝鮮には新しき地質時代の火山は少ないが溫泉は五十數箇所ある。

水は其意義が河とも水ともなると前に述べたが泉や井に比敵して冷水洞、清水洞、大水洞、藥水里等が多い、藥水は岩盤の罅隙から湧き出す水で多くは含鐵炭酸泉であつて其のあるものには遠方から飲みに来る者が蝸集する。夏期はさうした山あひのちよびちよびしか出ない泉の周圍が一大遊山場になることがある。

坪 平地を意味する。音ビョン訓ツェル又はボルである。大きな平地許りでなく谷の中の小平地をも坪と云ふ。里名の下の小員にも坪を用ふる。一般に朝鮮には大平地がない、大概砂質の川沿ひの平地である。粘土質の平野は全北の平野の外にはまづない。田畚原野何れにしても平地であれば坪である。内地の野又は平に該る。坪のついた地名は擧げることの出来ない程多い、倉坪、向坪、官坪官有地である、廣坪、草坪柴場であらう、葛坪、後坪、江坪、錦坪、梨坪、沙坪、松坪、柳坪等によくある地名である。咸南三水には天坪チヨンボリがある、位置の高い坪で次項の徳に比ぶべきものである。

坪を略して平となつたものは郡名にもある、加平、楊平砥平と楊根とを合併したもの、咸平、定平がそれで坪と書いたのではない。里名でも坪と書かずに平にしたものもある。

野 原 野は坪と同じ意味であるが坪程多く用ひられない。野は眞の原野で開拓の充分及ばないものを云ふのであらう。翠野黄海海州、瓦野里黄海瑞興等があり、昔は沙里院附近の載寧江平地の一部を棘城野と呼んだ。

原は地名に用ひられることが多い、殊に郡名としては次の如きものがある。水原、鐵原、原州、南原、昌原、平原、利原、高原、洪原、渭原これである。野を意味するのであらう。

德 現今の朝鮮音では^{タキ}であるが^{タキ}と云ふのである。時に嶮とか^{タキ}とも書く。(東國名山記)凡山峻逶迤高而上平者、北人謂之德。(北塞記略)北人以平坂爲德、北路諸山多以德爲名者以此也又は高埠曰德とあり、蓋し德は女眞語である。咸南咸北の玄武岩の臺地を主とし、片麻岩や石灰岩の高原が溪谷の爲めに分離して上の平かなメーサ狀の地形を呈したものが德である。滿洲の阜又は崗に略當る。加藤清正が銀鑛を掘つて製銀を太閤に献じたといふ咸南端川の檢德(又は檢義德山)を初めとして杉^{イカリ}德^{日本で云へばカラ}マツダヒラである樺皮德^{ヒシ}などがある、又德嶺と續けて德のある峠が少くない、即ち應德嶺、柏德嶺、長德嶺、葛麻德嶺等である。德は平な處を意味するので坪を^{タキ}と呼ぶ様になつた處もある。咸南甲山の大田坪はクンバ^{タキ}と云ふ。德の地形のよく顯はれてゐるのは五萬分一新福場^{甲山、二號}、亨足里^{甲山、三號}圖幅などである。德は咸北咸南から平北の奥地まで^{タキ}と云ふが其より南では德が著しく残つて居ない。

坡 音はバである、坂だとある。松坡、南坡、葛坡など中々多い、京城府内の龍山には青坡がある、坂ではあるが又段丘の意味もある様である。

台 台は小丘、段丘又は山頂が臺上になつて居るのを指す、餘り多くないがまた里名や峯

の名に見出す。

石 巖(岩) 石及び巖をつけた地名は甚だ多い、朝鮮では森林を濫伐したのと氣候が劇烈である爲めとて岩石の露出が甚だ好い。

石の方は天然の露岩又は砂礫などからつけたのでなくて築造物から來た石が少くない、白石里は珪石すいせきの出た處である、金鑛脈の殆んど總ては珪石から出來て居るが白いのには金が少ない。然し白石里の附近にはよき含金珪石脈を尋ねあてないものでもない。玄石里、廣石里、化石里などもある化石は古生物の意味ではない、美しい石位の意である。

立石里タシイと云ふのが多い。内地でも立石峠などがある様に古碑又は古い時代の築造物の殘骸がある處である。碑石洞もよくある、碑閣があることがある。また撐石コイシ又は支石と云ふのは高句麗時代の墓の封土が取り去られて中の玄室の四壁にした平たい大石が顯はれたものである。撐石のうちには石器時代に屬するものもあると説く人もある。支石洞とか撐石洞とか云ふ地名が各處に散在して居る、こんな地名はなくても人家から遠い畑中に支石が大きく残つて居るのを時に見ることもある。

巖又は岩は音アム訓バウイで之がついた地名は甚だしく多い。郡名としては靈巖があるのみであるが、鳳岩、龍巖龍岩浦の如く、德岩、花岩、雲岩、仙岩、赤岩、白巖などゝついたのはさらにある。門岩といふのは珪岩が堅い岩脈が出て谷を夾んで門の様に聳つたものである。休岩シルバウには往來の人の腰を

おろす大石がある。平北雲山の龜岩カメイワや大岩オオイワは金鑛である石英脈の露頭であつた。高句麗の巴衣は新羅で巖となり、又波兮及び波衣は岨ササとなつた様であるが我が四國で海岸から出た岩礁を濚ハエといふも巖イワの變轉したものであらう。

沙 砂 沙又は砂をつけた地名もかなりある。京城仁川間の素砂ソソなどを除くと沙の方が多い。沙岨セリコエと云ふのは大抵甚しく霽亂した花崗岩の出で居る低い峠で道がよくて越え易い。沙村サチョンと云ふのは河縁りの沙地である。渡し場の船頭のことを沙軍と云ふ。然し慶北高靈郡の沙鳧洞は沙夫であつて陶工のことを云ふのだと云ふことである、此處には磁器窯の遺址がある。(未完)

○菩提の瀧の甌穴

京都の西北、清瀧川の上流にある菩提の瀧は高さ二間餘の小さな瀧であるが、瀧の落口には美しい甌穴が二ツ並んで出来てゐる、二個の間は狭い溝を以つて連續してゐる。瀧の下へ降りて見ると斯る上流に珍らしい可愛らしい小丸礫が轉々してゐる、之は上流から流れて来る石片が壺の中へ入り渦流の爲に削磨されて此くの如き小礫が出来たのであらう。(船越素一)